

## チベットにおける農業と牧畜の現状

稲村哲也、本江昭夫（帯広畜産大学）、山本紀夫（総合研究大学院大学）、  
蘇鳳鳴（中国社会科学院）、楊中芸（中国中山大学）

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 農村の現状
- 3 半農半牧村の現状
- 4 牧畜村の現状
- 5 チベットにおける伝統的な生業形態とその類型化
- 6 おわりに

### 1 はじめに

本稿は、1999年度科学研究費補助金による研究「中国チベット高原の農業生態系における継続性ある生物生産に関する基礎的研究」（基盤研究B(2)課題番号・国11691169、研究代表者・本江昭夫）の現地調査の成果の一部であり、チベットにおけるコミュニティと生業の実態を、とりわけ牧畜に焦点をあてて整理し、検討を加えるものである。現地調査は1999年9月2日から22日までの期間に、中国社会科学院（蘇鳳鳴研究員）との共同研究として実施した。調査の方法は、下記（次頁以下）の1)から3)までのルートを車で移動しながら観察し、途中の村々で短時間（1時間前後）の聞き取りをおこなったものである（地図1）。調査を実施した場所（合計15の事例）を調査順のまま下記に列記するが、仮に、農村、半農半牧村、牧畜村と分類しておく。牧畜村は農業ができない高地部（高原または谷の上流部高地）に位置しヤー（ヤク）、ヒツジ、ヤギなどの牧畜が営まれる村である。谷部の村々では主として農業が営まれているが、そこでも家畜飼養が行われている。それらの村落を、家畜飼養の重要性

によって、農村と半農半牧村に分類することが可能である。ただし、その境界は必ずしも明確ではない。ここでは当面、高地適応家畜であるヤーやゾー（ヤーとウシの異種間雑種）の飼養のあり方を中心に、以下のような基準により分類しておきたい。

●農村：農耕を中心とする村。ヒツジ、ヤギ、乳用・肉用のウシを飼養する村や耕作用としてウシまたはゾー、ヤーを持つ村もあるが、村の共同の放牧地を持たず、またゾー、ヤーを飼養する場合も、夏期に牧民に預託するなど、その飼養を牧民に頼っている。

●半農半牧村：農耕を中心としながら家畜も飼養している。「農村」と異なり、共同の放牧地を持ち、耕作用のゾーやヤーの飼養も年間を通して村（ないし郷）のメンバーによって行われ、その飼養を牧民に頼ることはない。

●牧畜村：高地部でヤー、ヒツジ、ヤギなどを飼養する村

#### 1) ラサの近郊の谷の農耕地帯

##### ●農村

事例1 ラサ地区堆龍徳慶（ドゥーロンディチン）県サンモ村2組：ラサから西に18km、標高約3650m

事例2 ラサ市城関区リン村：ラサから東に約10km

#### 2) ラサから北へ谷沿いに遡り自治区境の高原まで（往復）

##### ●半農半牧村

事例3 ラサ地区堆龍徳慶（ドゥーロンディチン）県馬（マー）郷セシュ村：ラサから北に約30km、標高約3850m

##### ●牧畜村

事例4 ラサ地区當雄（ダンシュン）県拉陀（ラドゥ）郷ナルズィ村：當雄の南約50km、標高約4500m

事例5 當雄県ギャルゲン村5組：當雄の北約10km、標高約4250m

事例6 ギャルゲン村2組

事例7 那曲（ナクチュ）地区安多（アムド）県措瑪（ツォマ）郷1組：安多の西約30km、標高約4800m

事例8 措瑪郷2組

事例9 安多県ヨージャー郷2組：安多の西約10km

事例10 那曲（ナクチュ）地区果錯郷9組：那曲の北約30km、標高約4600m

事例11 ラサ地区當雄県尼珠（ニンドゥ）郷1組

##### ●半農半牧村

事例12 ラサ地区堆龍徳慶県徳慶（ドゥチン）郷扎西康（ターシーカン）：當雄の南約90km

3) ラサからツァンボ川沿いに西に向かい、日喀則（シガツェ）、定日（ティンリ）を經由し、そこから南に下りヒマラヤの南面ネパール側に至る

##### ●農村

事例13 曲下郷1村：シガツェに接した東の村、標高約3900m

##### ●半農半牧村

事例14 ニラム県満布（メンブ）郷普仁（プリ）村：シガツェから西南に約340km

事例15 同郷西木（シムー）村

地図1 チベット自治区の主な調査ルート



以下、上記事例に基づいて、農村、半農半牧村、牧畜村の現状をまとめる。

## 2 農村の現状

### 2-1 ラサ市近郊の農村

ツェンボ河支流のラサ川沿いの谷部に位置するラサ市近郊の農村2村の調査によるものである。事例1はラサから東に18kmで、事例2は西に約10kmに位置している。事例2の方がラサにより近いので、農業の商品作物化がより進んでいる。

事例1のサンモ村は1組から5組に分かれ、各組が集落をなしている。サンモ村全体の戸数は約300戸、人口は1350人で、調査対象とした2組は戸数56戸である。人民公社時には各組が生産隊に相当し、5つの生産隊（現在の5つの組）で人民公社が構成されていた。

事例2のリン村は戸数52戸、人口213人で、こちらの場合は「村」が集落をなしている。人民公社時は、リン村は菜公堂（ツェグンダン）人民公社に属していた。人民公社は農村が5隊、遊牧村が2隊の計7つの生産隊で構成されていた。

このように、一般に生産隊が現在の集落に相当するが、その集落が村と呼ばれている場合と、村の下位区分である組とされている場合がある。

この2例及び他の半農半牧村などの資料から、農業中心の人民公社は、数個（10未満）の集落（50戸程度）すなわち生産隊から編成されていたとみることができる。人民公社解体後の農業請負制実施時（1984年）に農地が各個人に配分されたが、1人当たりの耕地の広さは概ね4畝（ムー：15分の1ヘクタール）であった。土地配分の広さはラサに近い両村は少ない方で、遠いところでは7畝のところもある。このように配分面積は村によって若干異なり、事例1では、働ける者には4畝、働けない者には3畝が配分され、事例2では1人当たり3.8畝である。1984年に配分され、その後は再配分されていないため、それ以後に生まれた子供には現在のところ配分されていない。農業は家族単位で営まれており、1戸当たりの平均の耕地面積は10畝余りである。

主要作物はオオムギとコムギである。事例1の集落（5組）の合計では、耕

地面積が3056畝で、うちオオムギが1500畝（49%）、コムギが1450畝（47%）、残り（4%）がマメ、アブラナ、ジャガイモである。事例2では、耕地合計が555畝、うちコムギが350畝（63%）、オオムギが70畝（13%）、残り（24%）がアブラナ、ジャガイモ、ダイコンである。

事例2ではコムギの比率が高いが、人民公社時代にはオオムギを中心に作っていた。農業請負制になってからコムギ中心となり、野菜も多く作るようになった。それは、ラサに近いので商品作物の比重が高まったためである。約10年前から作物の売却は自由になり、現在はラサの市場に持って行って売っている。コムギとオオムギは政府に売ることもあるが、価格は市場価格と同じである。

事例1では下記のように、ジャガイモ、コムギ、若干のネギが商品化されている。

ジャガイモ：収穫8000斤、商品化5000斤（価格4角／斤）

ネギ：収穫200斤、商品化100斤（価格6角／斤）

コムギ・オオムギ：1畝当たり500斤収穫、商品化1000斤（7角／斤）

収入合計は単純計算で、 $2000 + 60 + 700 = 2760$ 元となる。なお、肥料は化学肥料を600斤（600元）購入している。

家畜頭数は事例1（56戸）では、ウシ290頭（5.2／1戸）、ゾー80頭（1.4／1戸）、ヒツジ50頭（0.9／1戸）、ヤギ少数、ウマ3頭である。ゾーはすべて耕作用、ウシは乳用（メス）及び肉用で、ウシは耕作用には使用されていない。ゾーを持たない家は、耕作時に1日20円で借りる。ゾーは遊牧民から購入したものである。夏の間、ゾーは高地の遊牧民に預けて飼養してもらい、その謝礼として、ゾー1頭当たり28斤のオオムギを支払っている。ヒツジとヤギは無料で預かってもらう。旧暦9月からの耕作期になると、高地からゾーを下ろし耕起に使用する。

事例2では、ウシ240頭（4.6／1戸）、ゾー12頭（0.2／1戸）で、ヒツジやヤギは今はいない（昔はあったが、現在は放牧用の草がないため）。ゾーは以前24頭あったが、最近12頭を売って、耕耘機を買った。現在ゾーを所有するのは6家族のみである。ゾーは夏の間は、シェーン村（ラサ市城関区）の遊牧民に預ける。村には旧暦9月に連れてきて耕起に使い、6月まで畑の刈り跡や村

の周辺で飼う。シェーン村は南の山の手前に定住村があり、その山の向こうに放牧地がある。14戸くらいの村でヤーとゾーを飼っている。シェーン村は人民公社時にリン村（事例2）と同一の人民公社に属していた牧畜村である。

## 2-2 シガツェ近郊の農村

事例13のシガツェの東に接する農村のみの事例である。1人当たりの配分耕地は4畝で、ラサ近郊と変わらない。主要作物はオオムギとコムギで、インフォーマントの例によれば、1戸の耕地面積27畝当たり、それぞれ10畝である。残りはアブラナ、ジャガイモ及びダイコンである。ラサ近郊と異なる点は、ここでは若干のソバも栽培されており、ソバ畑は灌漑しないため、配分耕地以外の土地を自由に利用することができる。

シガツェ近郊の谷では、耕起にはウシが使用されており、その点はラサ近郊の農村やゾーを使用するラサ北部の谷上流部の半農半牧村とは大きく異なるが、その理由は不明である。

家畜頭数はウシ（耕起用のオス、乳用のメスの合計で）約300頭（10頭/1戸）、ヒツジ・ヤギが約1000頭（33頭/1戸）である。村から離れた場所に日帰り放牧のできる共同の草地がある。そのため、ラサ近郊の農村とは異なり、かなりの数のヒツジ・ヤギも飼養されている。

## 3 半農半牧村の現状

### 3-1 ラサ地区北部の半農半牧村

ラサ地区北部の堆龍徳慶県の2村（事例3及び12）による。事例3の馬（マー）郷セシュ村は標高3850mに位置する戸数約70戸の村である。セシュ村が属していた馬公社は6村（6生産隊）で構成されていた。公社解体後、耕地は1人当たり4畝が配分されたが、山の放牧地は分配されずに共同で使われている。

主作物はオオムギで、コムギは少ない。他にエンドウマメ、アブラナ、ジャガイモ、ダイコンがある。インフォーマント（6人家族）の場合、20畝を耕作しているが、その内訳はオオムギ6割、コムギ2割、エンドウマメ2割である。

飼養家畜頭数は、下記の通りである。

ヤー 40頭（すべてオス）  
ゾー 400頭（メスは10頭位でほとんどがオス）  
ウシ 600頭：乳用（メス）100頭、肉用（オス）500頭  
ヒツジ 600頭  
ヤギ 400頭

ゾーについては、約70頭が耕起用、他は肉用で、売ることもある。特に望果祭、収穫祭（8月）などの機会に売る。ゾモ（ゾーのメス）は搾乳するが、ゾモはわずかに10頭くらいしかいないため、ゾーの飼養目的は搾乳とはいえない（それはヒマラヤ南面のシェルパの場合とは対称的である<sup>1)</sup>）。

ヤーとゾーは夏（6－9月）には山の方の高地部で放牧する。村の全てのヤー、ゾーを集めて、数人で放牧するが、1戸当たりで、3－4日が分担期間となる。10月－6月までは村に下ろして、耕起に使い、その後、刈り跡の畑などで放牧する。

ヤーはゴンギー村（同じ県だが、郷は異なる。歩いて5－6時間）の牧民から買っている。ゾーは村で生産している。すなわち、種ヤクを1頭買い、村のウシに種付けをして交配させている。

事例11のラサ地区堆龍徳慶県徳慶（ドゥチン）郷扎西康（ターシーカン）は當雄の南約95km、標高3950mに位置する約70戸の村である。徳慶郷は扎西康など7村からなり、以前は徳慶公社を構成していた。公社解体後の一人当たりの配分農地は事例3と同様に4畝であった。山の草地は個人配分されず、村の共同占有となっている。

主要作物はオオムギで、他にエンドウマメ、ジャガイモ、ダイコン、コムギなどを栽培している。

インフォーマント（7人家族）によれば、飼養している家畜はヤー4頭、ゾー1頭、ウシ11頭で、ヤーとゾーは耕起用、ウシは乳用（メス）及び肉用（オス）である。ヤーとゾーは夏は郷が手配した人がまとめて山の放牧地で放牧する。

### 3-2 シガツェ地区の半農半牧村

標高4400mに位置するニラム県満布（メンプ）郷の2村の事例（事例14及び

15) による。満布郷の前身である満布人民公社が解体された後、1人当たり6畝の耕地が配分された。オオムギを中心に、他にマメ、アブラナを栽培している。ジャガイモも栽培するが、時々うまく育つ程度だという。収穫時期を迎えたオオムギ以外にまだ緑色のオオムギが目についたが、それは播種時期を遅らせたもので、干し草にしてゾーの飼料にする。

事例14の普仁（プリ）村（戸数約40）で、飼養する家畜の頭数は以下の通りである。

ゾー 60頭

ウシ 90頭

ヒツジ・ヤギ 6000頭

ウマ 30頭

ここではウシは耕起には使わず、ゾーだけを耕起に使用し、村の全戸がゾーを所有している。ゾーは夏期（旧暦3月から6月）には山の上の共有の放牧地で放牧する。村の全てのゾーを集めて共同放牧地に2人が赴くが、その為に1家族当たり3元をその2人に支払っている。

事例15の西木（シムー）村は事例14に隣接する村であるが、ここではヤーのみが耕起に利用されている。家畜の概数は以下の通りである。

ヤー 80頭

ウシ 40頭

ヒツジ・ヤギ 4000頭

ウマ 20頭

このようにゾーは全く飼われておらず、隣村の耕作用家畜であるゾーがこの村ではそっくりヤーに入れ替わっている。ヤーを使う理由は、「こちらの村の土地の方が軟らかいため、ヤーで耕起が容易にでき、ゾーの方が草が多く必要であるため」とのことであったが、隣接する村で実際にどの程度土地質が異なるかは不明である。

#### 4 牧畜村の現状

牧畜を専業とする人々は、U字谷の上流-源頭部、及び高原部に居住してい

る。その生態学的に異なる2つの地域では、家畜の飼養形態及び居住形態が異なっている。そこで、以下ではその2つの地域に分けて述べたい。

##### 4-1 谷上流-源頭部の牧畜村

事例4、5、6及び11がこのタイプで、小規模の移牧（パストラル・トランスヒューマンズ）<sup>2</sup>が行われている。このタイプの特徴は、谷の支流基部などにアドベ造りの家屋が建ち並ぶ定住集落をもち、支流源頭部の高地に夏の放牧地を持つのが典型のようである。支流源頭部の高地までは、ほぼ一日で行ける距離にある。6-7月（旧暦）には夏の放牧地にテントを張り、各戸毎に放牧する。1戸当たり1、2名で2家族が一緒になって放牧するという事例もあった（事例4）。夏以外の時期は、集落に比較的近い谷部で放牧し、夜は定住家屋に付随した家畜囲いに家畜を集める。ここではテントを張らないことが多いが、放牧の便をよくするために、テントを張っている事例も見られた（事例5）。定住集落の近くには針金で囲った冬用の草場もあり、その草は刈って干し草にし、冬の飼料とする。また、母家畜または仔家畜がその中で採食している事例も見られた。

人民公社解体後に家畜は私有化され、1戸当たり20から70頭程度のヤーが飼養されている。人民公社の規模は、現在の郷に対応している場合が多い。郷は一般に10足らずの村（ないし組）で構成されている。放牧地は公社解体後は、村（ないし組）単位で共同利用されている。事例11の場合では、放牧地は家族毎に配分はされたが、共同で利用している。

##### 4-2 高原部の牧畜村

事例7-10がこのタイプである。高原部では、那曲県措瑪郷の郷長とその妻から聞き取りすることができた。

郷には15組が所属し、戸数688戸、人口3317人である。3つの公社が、解体を機に一つの郷に統合されたものである。郷全体の家畜数は、ヤー16500頭、ヒツジ8348頭、ヤギ9899頭、ウマ1310頭である。

1組に郷の中心があり、そこには、病院、獣医院、学校、道路管理局、郷政

府がある。また、郷には山の上にゴンバ（寺）があり、その山のふもとに尼僧のゴンバがある。それぞれ約20人の僧、約40人の尼僧がいる。

公社は1968年に始まり78年に解体した。解体後に家畜を分配し私有化した、家畜の配分数は組によって異なった。1985年に草地請負制により、草地が各戸に割り当てられた。その際、各戸の居住地に近い放牧地が割り当てられた。各戸毎に配分されたが、数戸が共同で草地を利用している場合もある。また、組によっては全体を共同で占有しているところもある。

事例7の場合（1組、36戸）、人民公社の時には1戸当たりヤー100頭、ヒツジ100頭くらいを請け負って飼育した。組（生産隊）全体では、ヤー、ヒツジそれぞれ数1000頭程度だった。

現在は家畜は私有化され、放牧地も配分されたが、郷長の場合、隣同士の4家族が共同で放牧地を占有し利用している。湖の岸から東西およそ10km、南北に見渡せる山までが占有領域である。通常はその範囲で日帰り放牧を行い、秋冬の草が悪い時には遠くに放牧するため、テントを使用することもある。移動の範囲は公社の時とあまり変わらないという。

テントによる移動放牧の時期は前項の谷上流-源頭部の牧畜村の場合のように一定していない。調査時期にテントで放牧をする牧民にも出会ったが、秋に移動放牧をし、距離は1日程度だという（事例8）。一年中定住家屋からの日帰り放牧をし、テントは利用していない場合もある（事例9）。

## 5 チベットにおける伝統的な生業形態とその類型化

1949年以後チベットは中国の統治下にあり、すでにみてきたように、農村や牧民のコミュニティは、人民公社を経て現在は中国の行政区分の枠組に規定されている。人民公社は従来のコミュニティの枠組みをかなり踏襲したともいわれているが、とくに家畜の移動範囲は以前と比べ非常に限定されている。高原部の牧畜コミュニティでも、1年の大半はヤクの群は定住の居住地から日帰り放牧がなされ、テントに住んで家畜を放牧するのは1年のうちの数ヶ月にすぎない。放牧範囲は1家族、数家族、1集落などの占有領域内に限定されているため、移動の距離も多くの場合1日の範囲内である。チベット自治区における

牧畜は、「農業請負制」によって家族毎に放牧地が配分された内蒙古自治区におけるモンゴル族遊牧民とはほぼ同じ状況にあるといえる<sup>3</sup>。つまり、現在の「遊牧」は「半定住半遊牧」という呼び方がふさわしい。

それでは中国統治以前のチベットにおける牧畜はどのようなものだったであろうか。まず、戦前の8年間にわたって北東部のチベット社会に住んだイクヴァルの報告からその概要をみてみよう [Ekval 1968]。

イクヴァルは、チベットの遊牧を、高地環境であることに由来する上下の移動性を特徴とし、モンゴル、カザフ、キルギス、イラン、サハラなど乾燥地の遊牧との違いを強調している。チベットでは高度によって、農耕地域と牧畜地域が明確に区分されるが、農耕の上限は、高緯度の北緯38度では約2700メートル、低緯度の北緯27度では約4500メートルである。牧畜地域はその上から雪線（一年中雪に被われる地域の下限）までであるが、北緯38度では3600メートルまで、北緯27度では5100メートルまでである。ヤー遊牧民はふつう1年間に3回から8回の移動を行い、特別な場合には12回に及んだ。冬の放牧地は標高が低く比較的暖かい場所が選ばれ、春になると、草の生長に合わせるように、順次高いところに移動してゆき、夏には雪線に近い最も標高の高いところで放牧した。ヤー遊牧民の中には、土や日干しレンガや畜糞で作ったり、掘った縦穴や洞窟を利用した冬の固定住居をもち、秋に草を刈り干し草にして冬のために用意する人びともいた。一方、定住を申しむべきことと考え、1年をとおしてテントで生活し干し草も作らない人びともいた。いずれの場合も冬は標高の低いところに下りた。そこは農村から比較的近い場所であるため、冬は農民との交流が盛んに行われた。とくに、遊牧民は草を「刈る」という農耕的な作業をあまり好まなかったため、固定の冬営地をもつ遊牧民は草刈りのために農民を雇うことが多かった。農民によっては現金収入と乳製品などを手に入れるいい機会となり、遊牧民と農民の間に親密な関係がつけられていたという。

イクヴァルによる記述から、遊牧にも冬の定住家屋をもつ形態と1年を通してテントに住んで移動するものがあったことがわかる。移動の範囲は現在よりもかなり広がったと思われるが、それは遊牧形態と地域によって大きな変異があったにちがいない。大規模な移動をしていた遊牧民は農村に近いところから

雪線までを移動していた。つまり、水平方向の移動に上下移動の要素を含んでいた。

また、イクヴァルの記述では、ゾーについては、その重要性は述べられているが、具体的な飼養の形態は明らかではない。おそらく、谷の上流部の農村ではゾーが飼われていたはずであり、現在の形態と近い形での移牧も行われていたことが推測される。

スタンはチベットにおける農耕と牧畜にかかわる二重の生活の様々な形態についてまとめている [スタン1993: 130]。スタンの記述に含まれている類型を明確にするため、番号を付けて引用しておこう。「① ある村は農業を主体としているが、近くに牧地を持っている。家畜は日中そこへ連れて行かれ、夜には家畜小屋に連れかえられる。そして冬にはずっと小屋に留まり、秋に刈りとられた株で養われる。② そうかと思うと他の農家では、家畜は夏中を牧地で過ごし、これを守る番人はテントに寝起きし、冬になるまで戻らない。③ 一民族が二つのグループに分かれていることも多い。③のA 一つは農民で、山あいの耕作地帯にいる。③のB 他の一つは純粹は遊牧者で高原の牧草地にいる。この二つの集団は同じ種族名をもち、同じ首領をいただいている。④ アムドでは、これと違って、遊牧の集団がごく小さな牧草地帯とベース・キャンプ的な冬の地区とをもっている。この冬の地区には家があり、集団の構成員すべて——夏は分散している——がここに集結する。これらの家には家畜小屋があり、家畜小屋の近くには一家族ごとに燕麦の畑があって、青いうちにこれを刈り入れて株とする。とにかく、ほとんどの場所でも、農耕地帯と遊牧地帯は互いに非常に接近しており、農民と牧人の接触は緊密で恒常的である。というのも、彼らは当然その生産物を互いに交換しあうからである。往々にして、この両者はただ一つの村落共同体に属し、⑤ あるいはただ一つの家族集団に属する。③ 一つの種族が、一方は一定の領域を放牧して歩く遊牧者、他方は農耕者というように分けられる場合でも、③のA 後者には畑や家のほかに、夏、家畜をつれてあるく牧草地がある。このような種族では、二重形態は重なってあらわれるわけである。こうした場合には、村、すなわち、農耕者の集団が、自分の畑、自分の牧草地以外に、村のいま一つの集団である遊牧者が利用する

休閒地や森や道路や水の配分などをも管理するのである。」

スタンはヤーとゾーを区別していないが、ここで記述されている諸形態は以下のように整理することができる。

- ① 日帰り放牧を伴う農村
- ② 移牧を伴う半農半牧村
- ③ 同一集団が農民(A)と牧民(B)に分かれる場合
- ④ 遊牧民(冬営地は固定し、牧草を栽培する)
- ⑤ 同一家族が農耕と牧畜を分担する農牧民: ②のバリエーション

これをみると、筆者らが調査したチベットの事例は、遊牧の移動回数や範囲が限定されたことを除けば、チベットの伝統的な生活形態をかなり踏襲していると判断することができる。ただし、スタンの類型のなかには、氷食谷の上流・源頭部の支流基部などにアドベ造りの家屋が建ち並ぶ定住集落をもち、支流源頭部の高地との間で移牧を行っているような比較的小規模な移牧を行う牧畜村が含まれていない。

スタンの類型をややおおざっぱにしてとりいれ、筆者らの調査に基づいて、類型化するならば、(1)日帰り放牧を行う農村、(2)移牧を行う半農半牧村、(3)移牧を行う牧畜村、(4)遊牧地域(現在は移動範囲が限定された「半遊牧」)の4つに類型化することができる。

## 6 おわりに

チベットにおけるヤー(ヤク)とゾーの飼養はヒマラヤと連続している。しかし相違点もかなりあることがわかった。ひとつはヤーとゾーの利用法に関するものである。ヒマラヤのシェルパ族の間では、耕起にはウシが使われることが多く、運搬用に高地ではヤク、高度が比較的低いソル地域などでは雄のゾー(ゾプキョ)が使われる。また、ヒマラヤでのヤク群の飼養は、ウシとの交配によってゾムを生産して売ることが主たる目的である。そして、ゾム群の飼養者はミルクの生産を主目的としている。チベットでは耕起にウシ、ゾー、ヤクのいずれもが使われ、それが場所によって異なっている。そして、ミルク生産を目的とするゾーの飼養は、今回の調査の範囲では全くみられなかった。

もうひとつの相違は移動に関するものである。ヒマラヤ地域はチベットに比べ標高差が大きいいため、移牧の規模も大きい。筆者（稲村）はそのヒマラヤの移牧を、クンブ地域など「高地シェルパ」の移農移牧型<sup>4</sup>、ソル地域のシェルパの定農移牧型、西部ヒマラヤやグルン羊飼いの牧畜専業移牧型の3類型に分類して整理している〔稲村1996〕。チベットにおける上記の類型(2)の移牧を行う半農半牧村の場合は、農耕には（異なる標高の農地を利用する）高度差利用を伴わないため、ヒマラヤの定農移牧型に当たる。また、類型(3)に当たるチベットの牧畜村における移牧は、専業牧畜型の移牧であり、ヒマラヤ地域の農牧複合型の移牧とは異なるタイプである。また、類型(4)のチベットの遊牧（上下移動の要素も含まれる）もヒマラヤにはないものである。

筆者らはこれまでヒマラヤ研究を進めてきたが、チベットにおける生業の実態がある程度把握できたことにより、両者の比較からさまざまな新しい課題が出てきそうである。

## 注

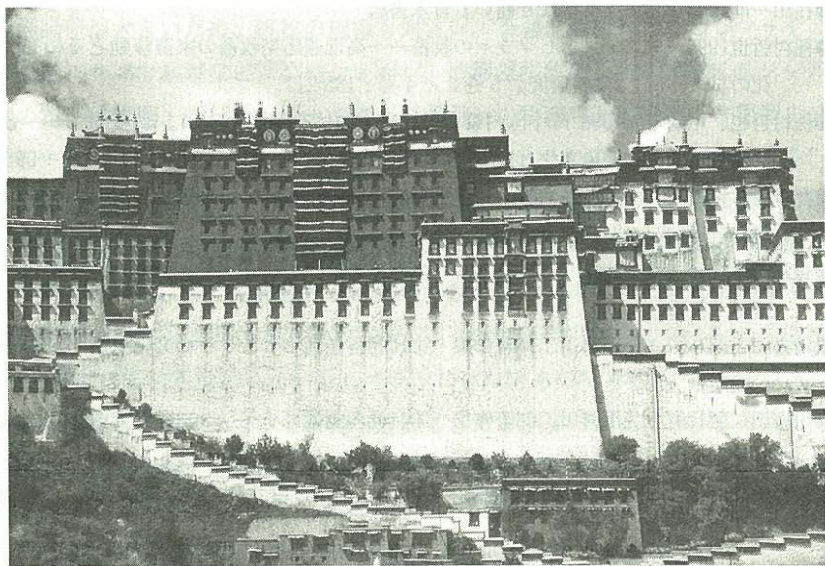
- 1 シェルパの家畜飼養については〔山本、稲村編2000〕で詳しく論じている。
- 2 「トランスヒューマンス」という用語は、典型的にはアルプスやヒマラヤに見られるような山地における規則的な家畜の季節的上下移動を指す用語で、日本では普通「移牧」と訳される。ただし、日本語の「移牧」に当たるのは正確には英語の「パストラル・トランスヒューマンス (pastoral transhumance)」であり、家畜の移動に限定されない広義の「トランスヒューマンス」とはきちんと区別しておく必要がある。
- 3 内蒙古自治区の現状については〔稲村他1996〕で論じている。
- 4 北のクンブやロールワリンにおいては、トランスヒューマンスは農・牧の両要素が密接に連動している。「農業と牧畜は、世帯レベルにおいて不可分の生業として統一されている場合が少なくない。その場合、農業においても高度の異なる複数の地点に耕地をもち、人々がその間を移動しながら耕作を行う例もしばしばみられる」(鹿野1978、1979)。チベット高原にはこのような移牧はなさそうである。

## 参考文献

- 在田一則1988『ヒマラヤはなぜ高い』青木書店
- 稲村哲也1996「アンデスとヒマラヤの牧畜——高地適応型牧畜の家畜移動とその類型化の試み——」『熱帯研究』5巻3/4号: 185-211
- 稲村哲也、尾崎孝宏1996『中国内蒙古自治区における環境と人口』調査報告——漢族移住、生産様式の変化と環境問題』『リトルワールド研究報告』13号: 57-99
- 鹿野勝彦1978「ヒマラヤ高地における移牧——高地シェルパの例をととして——」『民族学研究』43巻1号: 85-97
- 鹿野勝彦1979「ロールワリン・シェルパの経済と社会」『リトルワールド研究報告』3号: 1-42
- 川喜田二郎1997a『川喜田二郎著作集 第10巻各巻名: ヒマラヤの文化生態学』中央公論新社
- 川喜田二郎1997b『川喜田二郎著作集 第11巻各巻名: チベット文明研究』中央公論新社
- 酒井治孝(編著)『ヒマラヤの自然誌——ヒマラヤから日本列島を遠望する——』東海大学出版会
- スタン、R. A. 1993 (山口瑞鳳・定方晟訳)『チベットの文化 決定版』岩波書店
- 山口瑞鳳1987『チベット上』東京大学出版会
- 山口瑞鳳1988『チベット下』東京大学出版会
- 山本紀夫・稲村哲也(編著)2000『ヒマラヤの環境誌——山岳地域の自然とシェルパの世界——』八坂書房
- 山本紀夫・岩田修二・重田真義1996「熱帯高地とは——人間の生活領域としての視点から——」『熱帯研究』5巻3/4号: 135-150
- Ekvall, Robert B. 1983(1968) *Fields on the hoof: Nexus of Tibetan nomadic pastoralism*. Waveland Press, Illinois.



資料写真 1 チベットの首府ラサのポタラ宮殿



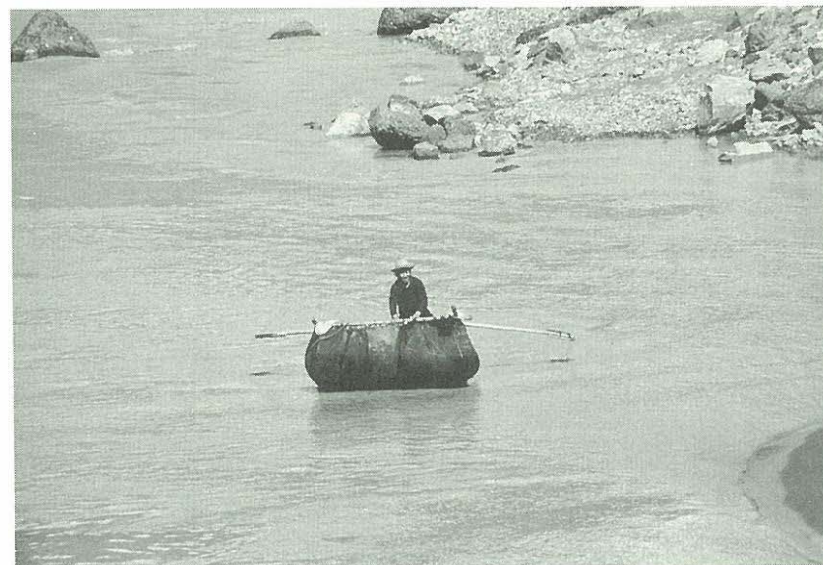
2 ラサの大昭寺で五体倒置し祈りを捧げる人々



3 ラサ近郊の農村でムギの脱穀を行う農民たち（事例2）



4 ツァンボ河を渡るヤク皮製の小舟





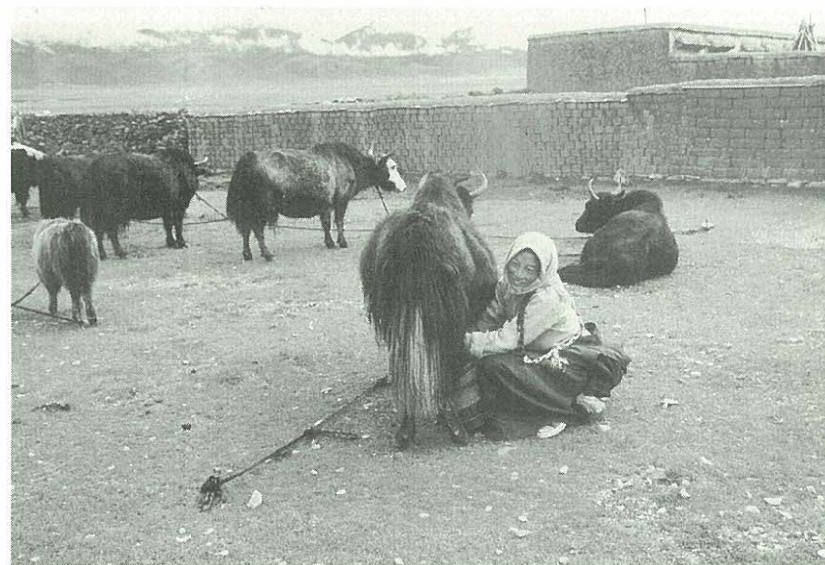
5 チベット高原の半農半牧村の学校（事例6）



6 半農半牧村のムギ刈り（事例3）



7 雌ヤクのミルク搾り（事例6）



8 ヤーによる鋤を耕起に使う半農半牧村の農民（事例15）





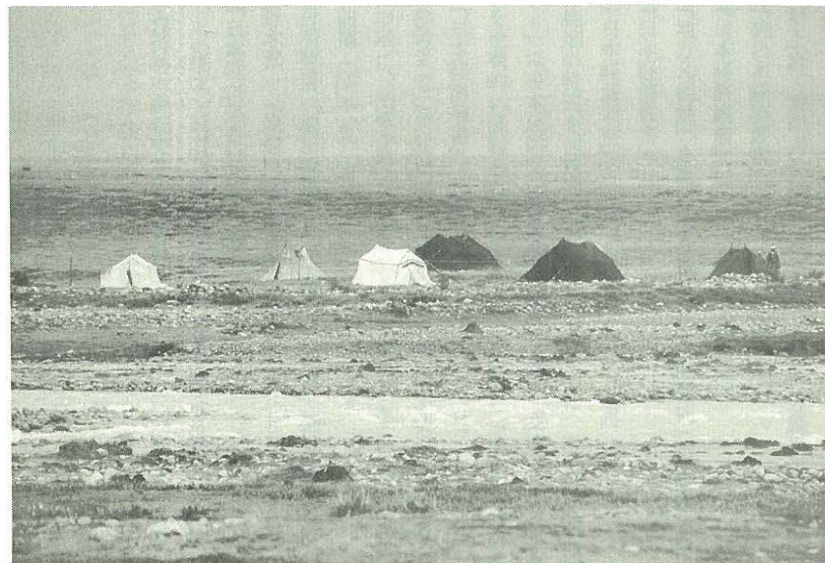
9 チベット高原で放牧されるヤク群



10 郷長夫妻（事例7）



11 遊牧用のテント、ヤク毛の織物で作られる伝統的なものと白いキャンバス地で作られる新しいものが混じっている。



12 遊牧用テントの内部（事例8）

